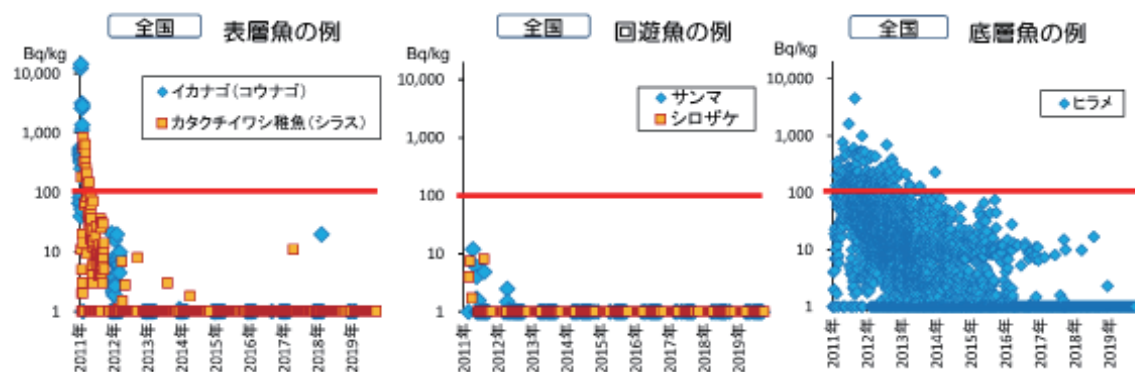


- 表層魚、回遊魚、底層魚、イカ・タコ類、エビ・カニ類、貝類、海藻類
時間の経過とともに放射性セシウム濃度は速やかに減少。直近で基準値を超えるものは、3年10ヶ月ぶりにコモンカスベ1検体から検出されたのみ（2019年1月）。
- 淡水魚
事故直後に比べ、基準値を超えるものは大幅に減少。

→生息域の環境や食性等が品目毎の傾向に関係。



注：福島県沖では、全ての魚介類（ただし、原子力災害対策本部長から出荷制限の指示等を受けている、コモンカスベを除く）を対象に試験操業・販売を実施。
注：各都道府県の詳細な検査結果は、水産庁ホームページ（<https://www.jfa.maff.go.jp/j/housyanou/kakka.html>）を参照

2011年3月24日から2019年12月31日までの調査結果を水産庁にて集計。

農林水産省

生息域の環境や食性の異なる魚種の放射性セシウム濃度の検査結果を紹介します。

コウナゴやシラス等の海面近くに生息している魚は、東京電力福島第一原子力発電所事故直後には高い値がみられましたが、現在では全てが基準値以下となっています。

サンマ、シロザケ等の海を広く回遊する魚は、事故直後であっても放射性セシウム濃度が100Bq/kgを超えるものはなく、50Bq/kg超の値もみられません。

底層魚（ヒラメ、カレイ等）の検査結果は、時間の経過と共に放射性セシウム濃度が低下し、直近では福島県で3年10ヶ月ぶりに基準値超過が1検体検出されたのみとなっています（2019年1月コモンカスベ）。

このように、生息域の環境や食性等が品目ごとの放射性セシウム濃度の傾向に関係することが、これまでの調査結果から示されています。

本資料への収録日：2013年3月31日

改訂日：2020年3月31日